

「歌物語」語彙の数量的分析と研究
 Quantitative Research and Analysis
 on the lexicon of "Uta Monogatari"

西端 幸雄

Yukio NISHIHATA

大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科

577 東大阪市菱屋西4-2-26

4-2-26, Hishiyanishi,

Higashiosaka-City, Osaka, 577

キーワード：歌物語，コード，数量的分析

Keywords : Uta Monogatari, Code,
 Quantitative Analysis

あらまし：「歌物語」とは、平安時代初期に成立した『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』の3作品の総称である。これらの作品は、物語の展開に関係ある歌を適宜配することにより、和歌とが融和した形で物語全体の展開を円滑にしているという点で共通している。また、作品全体の構成は、男女の恋を中心テーマとした短編の集まりとして成り立っている点で共通し、また、各作品相互に類似した内容を持つ短編物語が少なからずあるという点でも共通している。こうした共通点を持つという点からも、「歌物語」と総称される由縁がある。

ところで、これらの作品についての研究は、各作品個別には、国文学・国語学それぞれの分野において、長年行われてきた。ただ、「歌物語」と総称されるにせよ、これら3作品を総合的に捉えようとした研究は、国文学・国語学の両分野ともに、少ないのが現状である。しかし、本研究の準備段階における試験的な研究においては、「歌物語」3作品の使用語彙を相互に比較してみると、『伊勢物語』『大和物語』の2作品は、極めて類似した語彙を使用している傾向が強いのにに対して、『平中物語』だけが、使用語彙としては、かなり異質な側面を示して

いる点が明らかになった。

そこで、本研究では、これら3作品の使用語彙に対して相互に数量的・統計的処理を施すことにより、それぞれの作品の使用語彙の特色を明らかにすることを目的とする。

その目的のうち、次の4項目について、重点的に研究を行う。

- ア 各作品間の語彙的な面での類似点と相違点を明らかにする
- イ それぞれの作品間に有る類似した短編物語の中の使用語彙を数量的・統計的に比較し、各短編物語の語彙的な面での類似点と相違点を明らかにする。
- ウ それぞれの作品内の散文箇所での使用語彙と和歌での使用語彙の特色を明らかにする。
- エ 平安時代に成立した他の仮名文学作品（『源氏物語』『枕草子』等）と比較することにより、「歌物語」3作品の使用語彙の特色をより一層明らかにする。

Summary: Uta Monogatari is the collective title of 3 works, "Ise Monogatari", "Heichu Monogatari" and "Yamato Monogatari", written at the beginning of the Heian period. By properly arranging the poems which relate to the development of the story, they are similar in that they integrate story portions written in prose with waka poetry verse po

rtions to smoothly develop the entire story.

Other commonalities include the fact that the entire works are structured as collections of short pieces on the theme of male-female love, and that there are at least a few similar themes which appear in all of the short tales. It was on the basis of these commonalities that these works came to be known collectively as Uta Monogatari.

Although research on these individual works has been conducted in the fields of Japanese language and literature for many years, at present there are few comprehensive studies in these fields of these three works as a whole. But in the experimental research conducted in preparation for this project, an overall comparison of the lexical items employed in the works revealed a strong resemblance between the items used in "Ise Monogatari" and "Yamato Monogatari", but differences between these two and "Heichu Monogatari".

The purpose of this research is to clarify the characteristics of the lexical items used in each work through quantitative and statistical analyses. The research is based on the four points outlined below.

- (a) to determine the similarities and differences among the lexical items used in the three works
- (b) to quantitatively and statistically compare the lexical items used in those short tales which are common in all three works in an effort to determine the lexical similarities and differences among the different tales
- (c) to compare the prose and verse portions in each work to determine the characteristics of the lexical items in the two
- (d) to determine the lexical characteristics of the three works in Uta Monogatari through a comparison with other works (Genji Monogatari, Makura So shi) in the kana literature which developed during the Heian era.

1 「歌物語」について

「歌物語」とは、平安時代初期に成立した『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』の3作品の総称である。

これらの作品は、物語の展開に関係ある和歌を適宜配することにより、散文である物語部分と韻文である和歌とが融和した形で物語全体の展開を円滑にしているという点で共通している。また、作品全体の構成は、男女の恋を中心テーマとした短編の集まりとして成り立っている点で共通し、また、各作品相互に類似した内容を持つ短編物語が少なからずあるという点でも共通している。こうした共通点を持つという点からも、「歌物語」と総称される由縁があろう。

ところで、これらの作品についての研究は、各作品個別には、国文学・国語学それぞれの分野において、長年行われてきた。ただ、「歌物語」と総称されるに足らずには、これら3作品を総合的に捉えようとした研究は、国文学・国語学の両分野ともに、少ないのが現状である。しかし、本研究の準備段階における試験的な研究においては、「歌物語」3作品の使用語彙を相互に比較してみると、『伊勢物語』『大和物語』の2作品は、極めて類似した語彙を使用している傾向が強いものに対して、『平中物語』だけが、使用語彙としては、かなり異質な側面を示している点が明らかになった。

そこで、これら「歌物語」3作品の使用語彙のうちの自立語を数量的に比較することによって、それぞれの作品の語彙の特徴を明らかにすると共に、これら3作品を「歌物語」と称して、あたかも等質な作品のように取り扱ってきた、これまでの国文学・国語学の分野における姿勢に対しての疑義も提示してみたい。

なお、本稿で用いる「歌物語」3作品の語彙データについては、平成6年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付により刊行した『歌物語総合語彙索引』（西端幸雄・木村雅則共編 勉誠社刊）に付載したフロッピー内の語彙データベース（約48000語）を使用することとする。

II 語のコード化

ところで、作品に使用されている語彙を比較する場合、その語彙そのままを比較を行ったとしても、語形の違いや使用されている語種の違い程度が明らかになるだけで、厳密な比較は行えない。そのため、品詞や意味といった語の性格を表す情報を語に対して付加しなければならない。

ということで、筆者は、これまで、古典文学作品に使用されている語に対して、以下に詳述するようなコードを付けることにより、それぞれの語の性格を明示できるようにしてきた。現在、平安時代を中心にした散文・和歌作品19作品での使用語彙に対して、コード化を完了している。

その語のコード化の拠り所とした資料は、『分類語彙表』（国語研究所編・秀英出版刊）である。この『分類語彙表』は、現代語を文法的・意味的性格に分類しているため、古典語を適用する場合、様々な問題点はあったが、『分類語彙表』の分類方法に照らし合わせて、古典語の分類についても、できる限り厳密な作業を行なった。

いま、そのコード体系の一端を摘記すると、下記の通りである。ただし、この基準のうち、現代語と古語との性格の違いによって、『分類語彙表』では取り扱われていない「固有名詞（人名）」「枕詞」の分類が問題となったが、本稿においては、この「固有名詞（人名）」を大分類の<1>類、小分類の<-2>に、「枕詞」を、便宜的に大分類の<4>類に入れることにした。

大分類（1000の位・文法的性格）

- 1 体の類 名詞
- 2 用の類 動詞
- 3 相の類 形容詞・形容動詞・連体詞・一部の副詞
- 4 その他 接続詞・感動詞・一部の副詞・枕詞

小分類（100の位・意味的性格）

- 1 抽象的關係（人間や自然のあり方のわく組み）
- 2 人間活動の主体
- 3 人間活動——精神および行為
- 4 人間活動の生産物——結果および用具
- 5 自然——自然物および自然現象

なお、『分類語彙表』では、各語句を、さらに細かく意味別に分類し、全体として、3～4桁のコード番号で、それぞれの語句の文法的・意味的性格を表しているが、本稿においては、小分類以下の位の分類（10の位以下）は、特に断わらない限り、取り扱わないこととする。また、大分類の<4>類については、『分類語彙表』では、<41><43>といった小分類を施しているが、本稿においては、その小分類は施さず、大分類のみにとどめた。

さて、上記の基準によって、それぞれの語に対して、文法的・意味的性格付けを行なったのであるが、それぞれの分類に該当する具体例を示すと、以下のようになる。

・文法的・意味的性格付けの具体例

- 11 あかつき（暁）、あき（秋）
- 12 あま（海人）、あかし（明石）
- 13 あきのこころ（秋心）、あきのわかれ（秋別）
- 14 あかぢのにしき（赤地錦）、あきた（秋田）
- 15 あかつきつゆ（暁露）、あきやま（秋山）
- 21 あかす（明）、あく（上）
- 23 あかしくらす（明暮）、あく（飽）
- 25 ある（荒）、いく（生）
- 31 あさし（浅）、あし（悪）
- 33 あさまし（浅）、あぢきなし（味気無）
- 35 あかし（明・赤）、きよし（清）
- 4 あかねさす（茜）、あな（感動）

以上のような語のコード化を通して、これまで以下のような点を考察してきたのであるが、その中で、このコード化したデータをもとに当

該作品の使用語彙を見てみると、その性格をかなり鮮明に捉える得るということも実証できた。

- ・「八代集和歌語彙の性格—その意味的性格と語彙史的な位置づけを探る」（樟蔭国文学29・1992年）
- ・「和歌と語彙—語彙の変遷と八代集和歌の変遷」（日本語研究センター報告1・1992年）
- ・「和歌と散文の使用語彙の比較」（日本語研究センター報告2・1993年）
- ・「語彙史の立場から見た『拾遺和歌集』—使用語句の性格を統計的に見る」（国語語彙史の研究14・1994年）
- ・「古典文学作品の使用語彙の性格—『古典対照語い表』データのコード化を通して」（樟蔭国文学31・1994年）

III 「歌物語」3作品間の比較

では、実際に「歌物語」3作品の使用語彙に対してコードを与えたデータをもとに3作品の使用語彙の性格を比較してみることにする。

ここで取り扱う語は、先にも断ったが、付属語を除いた自立語だけとする。この自立語だけに限定する意図は、作者の物の見方・考え方が直接に語として表現されているのが自立語であるということからである。

後掲の表1【作品別使用語彙の性格<異語数>】には、「歌物語」3作品の全自立語をコード別に整理し、さらに、それを散文と和歌とに分類したものを掲げた。

まず、この表1の中の《全体》項目の<体の類の合計><用の類の合計><相の類の合計>の欄に注目すると、『伊勢物語』『大和物語』に占める<体の類>の割合と比較して、『平中物語』に占める<体の類>の割合がきわめて低く、逆に両者の<用の類>の割合を見ると、『平中物語』の割合が高いのに対して、『伊勢物語』『大和物語』の割合が低いということが分かる。また、両者の<相の類>の割合を見ると、『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』それぞれに占める割合が、わずかずつ異なっているということも分かる。

この一点だけからしても、これら「歌物語」

3作品を等質な作品として、同列に取り扱うことを再考する必要があるということが分かる。

さらに、「歌物語」3作品の使用語彙の性格の違いを明らかにするため、《全体》項目の<体の類><用の類><相の類>の内部の細かな点について比較を行ってみると、まず、次のような相違点のあることが分かる。

- ① <1 1>『伊勢物語』に占める割合が高く、『平中物語』『大和物語』は、ほぼ同じ割合である。
- ② <1 2>『大和物語』に占める割合がきわめて高いのに対して、『平中物語』に占める割合がきわめて低い。
- ③ <1 3>3作品に占める割合は、ほぼ同じである。
- ④ <1 4>『伊勢物語』『大和物語』に占める割合が、ほぼ同じであるのに対して、『平中物語』に占める割合が低い。
- ⑤ <1 5>3作品に占める割合は、ほぼ同じである。
- ⑥ <2 1>『伊勢物語』『大和物語』に占める割合が、ほぼ同じであるのに対して、『平中物語』に占める割合が高い。
- ⑦ <2 3>『伊勢物語』『大和物語』に占める割合が、ほぼ同じであるのに対して、『平中物語』に占める割合が高い。
- ⑧ <2 5>3作品に占める割合は、ほぼ同じである。
- ⑨ <3 1>『伊勢物語』『平中物語』に占める割合が、ほぼ同じであるのに対して、『大和物語』に占める割合が低い。
- ⑩ <3 3>3作品に占める割合は、ほぼ同じである。
- ⑪ <3 5>3作品に占める割合は、ほぼ同じである。

以上に掲げた点から、「歌物語」3作品の使用語彙の性格を、総括的に見れば、『伊勢物語』『大和物語』の使用語彙の性格に比べ、『平中物語』の使用語彙は、特に、<1 2: 体の類・人間活動の主体><1 4: 体の類・人間活動の生産物—結果および用具><2 1: 用の類・抽象的關係（人間や自然のあり方のわく組み）

><23:用の類・人間活動ー精神および行為>において、その違いが顕著に現れており、異質な面を持っていると言えよう。

また、このような「歌物語」3作品の使用語彙の性格が、散文における使用語彙が関わって生じているのか、和歌における使用語彙の性格が関わって生じているのかを検討してみると、後掲の表1の中の《散文》項目と《和歌》項目の<体の類の合計><用の類の合計><相の類の合計>の欄に注目すると、総括的に見た場合、『平中物語』において、<体の類>の占める割合が低く、<用の類>の占める割合が低いという傾向は、和歌にも『伊勢物語』『大和物語』とは異質な面が見られるが、それ以上に散文の方に比較的顕著に現れていることが分かる。つまり、『平中物語』の使用語彙は、同じ「歌物語」と称される『伊勢物語』『大和物語』とは異なり、これら3作品を「歌物語」として同列に扱うことは、少なくとも、国語学的な観点から見た場合、危険であると言えよう。

IV 仮名散文作品との比較

前項において、「歌物語」3作品のうち、『伊勢物語』『大和物語』に比べ、『平中物語』の使用語彙の性格が異質である点を指摘したが、では、これら「歌物語」3作品、特に、使用語彙が特異だとした『平中物語』は、平安時代、およびそれに近接した時代に成立した他の仮名散文作品と、使用語彙の性格の面でどのような関係にあるのかを検討してみることにする。

ここで取り扱う作品は、後掲の表2に掲げたように、「歌物語」と同時代の平安時代に成立した作品として、『竹取物語』から『大鏡』、その後続く時代の作品として、『方丈記』『徒然草』、また、参考として、奈良時代成立の『万葉集』を取り上げた。(作品名の項目に『伊勢』『天伊勢』とあるのは、『校本伊勢物語』と『天福本伊勢物語』を表す。なお、本稿で、取り扱っている『伊勢物語』は、『天福本伊勢物語』である。)

表2に掲げた作品のうち、平安時代に成立した主だった作品についての数量的分析については、すでに、「古典文学作品の使用語彙の性格

ー『古典対照語彙表』データのコード化を通して」(樟蔭国文学31・1994年)において行ったが、その中で、物語性の強い『源氏物語』については、次のようにまとめた。

『源氏物語』は、『竹取物語』が示す割合(体の類 43.6%、用の類 40.3%、相の類 14.1%)と関連づけて考えると、純粋な物語作品の特色を如実に表しているものと言えよう。これらの作品に『夜半の寢覚』『浜松中納言物語』を加えて検討すると、それぞれの作品に占める名詞と動詞の割合は、以下の通りである。

	体の類	用の類
竹取物語	43.6	40.3
源氏物語	42.4	44.7
夜半の寢覚	35.5	42.5
浜松中納言物語	37.0	42.1

上に掲げた割合が、『源氏物語』と『夜半の寢覚』『浜松中納言物語』との間で隔たりを見せているのは、単位の取り方の違いに起因しているものとも考えられる。(中略)名詞の占める割合より動詞の占める割合の方が高いという点では、上記の三作品における使用語彙の性格は、共通していると言えよう。ということは、本稿において扱っている『源氏物語』や『竹取物語』が示す体の類・用の類の割合は、物語作品共通の性格を表しているものと考えて間違いはないだろう。

さらに、本稿で問題にしている「歌物語」3作品のうち、『伊勢物語』については、次のようにまとめた。

これらの作品中で唯一歌物語のジャンルに属する『伊勢物語』に目を移すと、以下に示すような割合を示しているが、

	体の類	用の類	相の類
伊勢物語	54.4	31.9	12.4
古今集	54.8	32.7	11.1
後撰集	52.9	34.7	10.9

土左日記 54.6 30.3 13.6

この『伊勢物語』の示す割合は、上に掲げたように、和歌集の『古今集』『後撰集』と近似しており、さらに、ジャンルは異なるものの、所収和歌の比較的多い『土左日記』とも近似している。(中略)『伊勢物語』の体の類・用の類・相の類の割合が、『古今集』や『後撰集』と近似し、中でも、『古今集』とは、ほとんど同じ割合を示していることは、興味深い点である。この『伊勢物語』と『古今集』の関係については、『伊勢物語』の成立を、『古今集』所収の業平歌との関連でとらえようとする見方があり、室伏信助氏の「勅撰たる古今がなければ生まれ得ない物語が伊勢物語ではなかったか」といった意見が示唆に富むものである。

以上の点から、まず、『平中物語』に注目すると、この『平中物語』に占める〈体の類〉の割合43.8%、〈用の類〉の割合40.8%というのは、表2の中の『竹取物語』におけるそれぞれの割合〈体の類〉の割合43.6%、〈用の類〉の割合40.3%と近似していることが分かる。そして、前記引用中で述べたように、この『竹取物語』は、『源氏物語』と近い、極めて物語性の強い作品である。ということからすると、『平中物語』は、物語内部の形式としては、物語と和歌とを適宜配して、物語の展開をはかっているという点では、「歌物語」と称されようが、その作品の使用語彙の性格からすれば、『竹取物語』や『源氏物語』といった純粋な物語作品に極めて近いものであると言えよう。

一方、『伊勢物語』『大和物語』の方は、全体的に見た場合、〈体の類〉の割合55.0%と55.9%、〈用の類〉の割合30.7%と30.8%と、両作品の使用語彙の性格が類似している点、また、『伊勢物語』の使用語彙の性格は、上記引用中にも述べたように、『古今集』『後撰集』といった和歌集や和歌を多く配して日記を進行させている『土左日記』と近いという点で、和歌に比重を重く置いた、文字通り「歌物語」と呼ばれるにふさわしい作品であると言えよう。

V 最後に

以上、「歌物語」3作品の使用語彙の性格から、それぞれの作品の特色を明らかにし、また、特に、『平中物語』については、「歌物語」というジャンルに置いて、『伊勢物語』『大和物語』と同列に取り扱ってよいのかという疑義を提示した。

ただ、本稿は、まだ試論段階で、それぞれの作品の使用語彙に対して付けたコードの上2桁の範囲でしか、問題の解明を図らなかった。今後は、それを、コード全体で検討することによって、「歌物語」3作品の使用語彙の特色をよりいっそう明らかにしてみたいと思う。

表1 作品別使用語彙の性格<異語数>

上段 = 語数 下段 = 割合 (%)

	伊 勢			平 中			大 和		
	全 体	散 文	和 歌	全 体	散 文	和 歌	全 体	散 文	和 歌
1 1	240	162	78	169	130	39	266	175	91
	14.6	14.8	14.2	12.7	14.8	8.7	12.4	11.9	13.6
1 2	253	205	48	140	103	37	436	367	69
	15.4	18.7	8.8	10.5	11.7	8.2	20.4	24.9	10.3
1 3	113	85	28	82	57	25	133	89	44
	6.9	7.8	5.1	6.2	6.5	5.6	6.2	6.0	6.6
1 4	122	79	43	55	30	25	144	110	34
	7.4	7.2	7.8	4.1	3.4	5.6	6.7	7.5	5.1
1 5	176	72	104	129	37	92	218	82	136
	10.7	6.6	19.0	9.7	4.2	20.4	10.2	5.6	20.3
体 の 類 の 合 計	904	603	301	575	357	218	1197	823	374
	55.0	55.1	54.9	43.3	40.6	48.4	55.9	55.9	55.9
2 1	242	168	74	260	160	100	313	222	91
	14.7	15.3	13.5	19.6	18.2	22.2	14.6	15.1	13.6
2 3	223	151	72	245	193	52	303	226	77
	13.6	13.8	13.1	18.4	22.0	11.6	14.2	15.4	11.5
2 5	40	18	22	37	13	24	43	18	25
	2.4	1.6	4.0	2.8	1.5	5.3	2.0	1.2	3.7
用 の 類 の 合 計	505	337	168	542	366	176	659	466	193
	30.7	30.8	30.7	40.8	41.6	39.1	30.8	31.7	28.8
3 1	132	86	46	116	82	34	144	89	55
	8.0	7.9	8.4	8.7	9.3	7.6	6.7	6.0	8.2
3 3	62	47	15	49	43	6	78	56	22
	3.8	4.3	2.7	3.7	4.9	1.3	3.6	3.8	3.3
3 5	16	13	3	18	13	5	26	19	7
	1.0	1.2	0.5	1.4	1.5	1.1	1.2	1.3	1.0
相 の 類 の 合 計	210	146	64	183	138	45	248	164	84
	12.8	13.3	11.7	13.8	15.7	10.0	11.6	11.1	12.6
4	24	9	15	29	18	11	37	19	18
	1.5	0.8	2.7	2.2	2.0	2.4	1.7	1.3	2.7
総 数	1643	1095	548	1329	879	450	2141	1472	669

表2 仮名散文作品の使用語彙の性格〈異語数〉

上段=語数 下段=割合(%) <『万葉集』は参考に掲載>

	竹取	伊勢	天伊勢	平中	大和	土左	蜻蛉	枕	源氏	紫日	更級	大鏡	方丈	徒然	万葉
1 1	179	251	240	169	266	171	502	605	1196	369	303	845	213	545	629
	13.7	14.8	14.6	12.7	12.4	17.4	14.0	11.5	10.5	15.0	15.5	17.5	18.6	12.9	9.7
1 2	124	247	253	140	436	134	295	718	1118	300	236	1096	120	670	1161
	9.5	14.6	15.4	10.5	20.4	13.6	8.2	13.7	9.8	12.2	12.1	22.7	10.5	15.8	17.8
1 3	88	111	113	82	133	64	291	443	1097	228	111	498	85	604	302
	6.7	6.6	6.9	6.2	6.2	6.5	8.1	8.4	9.6	9.2	5.7	10.3	7.4	14.2	4.6
1 4	76	130	122	55	144	45	261	507	637	184	117	343	83	314	615
	5.8	7.7	7.4	4.1	6.7	4.6	7.3	9.7	5.6	7.5	6.0	7.1	7.2	7.4	9.5
1 5	104	182	176	129	218	123	341	518	796	160	188	282	154	359	1162
	7.9	10.8	10.7	9.7	10.2	12.5	9.5	9.9	7.0	6.5	9.6	5.9	13.4	8.5	17.9
体の類の合計	571	921	904	575	1197	537	1690	2791	4844	1241	955	3064	655	2492	3869
	43.6	54.4	55.0	43.3	55.9	54.6	47.0	53.2	42.4	50.3	49.0	63.6	57.1	58.8	59.5
2 1	259	264	242	260	313	143	724	920	2439	415	329	615	162	588	1143
	19.8	15.6	14.7	19.6	14.6	14.5	20.1	17.5	21.4	16.8	16.9	12.8	14.1	13.9	17.6
2 3	233	234	223	245	303	137	545	756	2297	364	288	537	144	574	700
	17.8	13.8	13.6	18.4	14.2	13.9	15.1	14.4	20.1	14.7	14.8	11.1	12.5	13.5	10.8
2 5	36	41	40	37	43	18	101	141	364	57	75	93	28	84	204
	2.7	2.4	2.4	2.8	2.0	1.8	2.8	2.7	3.2	2.3	3.8	1.9	2.4	2.0	3.1
用の類の合計	528	539	505	542	659	298	1370	1817	5100	836	692	1245	334	1246	2047
	40.3	31.9	30.7	40.8	30.8	30.3	38.1	34.6	44.7	33.9	35.5	25.8	29.1	29.4	31.5
3 1	106	128	132	116	144	90	257	299	760	188	149	248	94	252	277
	8.1	7.6	8.0	8.7	6.7	9.1	7.1	5.7	6.7	7.6	7.6	5.1	8.2	5.9	4.3
3 3	60	63	62	49	78	32	175	203	496	131	86	160	31	165	129
	4.6	3.7	3.8	3.7	3.6	3.3	4.9	3.9	4.3	5.3	4.4	3.3	2.7	3.9	2.0
3 5	19	18	16	18	26	12	62	87	148	47	49	58	15	48	55
	1.4	1.1	1.0	1.4	1.2	1.2	1.7	1.7	1.3	1.9	2.5	1.2	1.3	1.1	0.8
相の類の合計	185	209	210	183	248	134	494	589	1404	366	284	466	140	465	461
	14.1	12.4	12.8	13.8	11.6	13.6	13.7	11.2	12.3	14.8	14.6	9.7	12.2	11.0	7.1
4	21	22	24	29	37	15	43	34	67	16	19	43	19	35	106
	1.6	1.3	1.5	2.2	1.7	1.5	1.2	0.6	0.6	0.6	1.0	0.9	1.7	0.8	1.6
総数	1311	1692	1643	1329	2141	984	3598	5246	11421	2468	1950	4819	1148	4240	6505